

オランダ齋宮活動報告

山蔭神道教務部

昨年一二月、アムステルダムポール

宮司が現地雑誌「Volkskrant Magazine」の取材を受けました。

ポール氏が活動を継続できますことは、大神様のお導きと御加護のお蔭であると深く感謝申し上げますと共に、多くの皆様、長きにわたる御支援と御協力のお蔭であると、深く御礼を申し上げます。感謝と共に、記事の一部を御紹介致します。

【雑誌記事抜粋】

まずポールに、「神道とは何か」という質問から尋ねた。これは最も難しい質問なのだが。

ポールは少し考えた。むしろ黙っているのがいいと思えるほどだ。

「なんとも答えようがないのですが。神道が何であるか、それは「体験」するしかありません」「自分はひとつの考え方に辿り着きました。人は自然と共に調

和して生きていくということ。そこでは、純粹で目に見えない自然の力がある。このエネルギーが妨げられると、家や工場の建築にあつても、この調和が妨げられてしまう。でも逆に言えば、神道で改善できる可能性があるわけで、例えば妄想で苦しんでいる場合でも、神道は役に立つこともあるわけです。」

「御祭は自然への崇敬を表し、神に自然のエネルギーと共にあるようにします。また自然を汚すこともないように願います。日本の会社からの依頼で、御祭（編集部註 地鎮祭や竣工祭）をオランダで行ったことがあります。（現在では現地の）全ての日本の会社がこのような伝統的ともいふべき道を選択はしないようにで

す。それが残念といえれば残念ですが。（中略）日本からオランダにくる観光客で、アムステルダムの神社を訪ねてくる人がいます。彼らは、オランダで神道がどう扱われているかを見て、そして直感を得て帰ることになります。仮にシンントウ（神道）というものが日本に、外国から逆輸入されるならば、そのときこそ本当に神道に（日本の若い世代の）目が向いてくるものと思います。」（抜粋以上）



この記事はオランダ語で紹介され、それをポール宮司が英訳し、親交深い小室良韶氏に依頼して日本語訳をつけて貴嶺宮に届けてくれたものです。

後日のポール宮司はメールで「本記事は、週末に最も読まれた五つの特集記事の第一位に輝いた。取材した女性記者は、それほど反響を呼ぶとは期待していませんでした。これこそオランダの精神状態がそれを求めている証拠ではないかと思えます。今や人々が神道にやってくる時なのでしょう。」と述べています。

【写真】 雑誌記事の巻頭部

